

られることとなつたのである。

即ち本書の第三章は、從來古禮經に見ゆる器名によつて呼ばれてゐた形態分類の必然性を認めつゝも、學的に純粹なる立場を築くためにこれを排して、容器の形態として普遍的な名辭のもとに再編成せられた分類觀を以て器形の別を考へ、これを十三類二九種に統一せられた經過の記述に當てられてゐる。次いでかくの如く分類せられた個々の形態が、他の形態に對しては自己を固定化してゐる半面、それ自體のうちにも形の變化を含む事實によつて、形式列の考定の可能を認め、第四章においてこの動向を一つ一つについて説明してゐる。個々の器形別に編輯せられた圖版寫眞の配列が、かゝる視點によつて組成せられてゐることは、いふまでもない。

かくの如く個々の器形に分離せられ、各々のうちにおいて形式列を認められたものに對して、これを古銅器全體としての形式列にまでまとめようとするのが第五章前半の内容である。こゝでは器形を異にするものうちにも地域的一括遺物として同時的存在を考へ得るもの、銘文・圖文等を同じうするもの、更に器體・器形の細部に類似を示すものなどによつて、器形別の形式列間の横の關係が考察せられてゐる。かゝる過程を経て著者が先に得られた個々の器形の形式列が相互に矛盾するものでないこと、換言すれば全體としての古銅器の相對的年代觀を導くに足るものであることを自證せられた。同章の後半はこの相對的年代觀を實年代觀にまで推し、める處理の素描に當てられてゐるが、こゝでも資

料の吟味不十分なる理由によつて從來の中國學者の銘文による年代想定を退け、先づ紀年銘ある銅器の諸例が著者の形式列の最下限を示すに役立つことを明らかにし、上限を殷墟の出土品によつて殷代の後半に求め、且つその形式列の後半を占めるものが戰國式銅器に他ならぬことを述べて、一應の解明を果たされたのである。

聞くところによれば著者の支那古銅器の研究は、形態・文様・銘文の三方面より論攷せられる計畫であるといふ。従つて本書に説かれたところといへども、——ことにその實年代觀などに、他日更に修補せられ精密さを加へるものがあることが期待せられ、本書の價値もまたその三部作完成の日において一段と光彩を増すべきものであることが思はれる。しかもそれは本書が今日において學界の期待しうる最高の支那古銅器研究の段階を誇示するに足るものと見ることをさまたげないのであらう。本書の結論として掲げられた、これらの古銅器の形態が容器としては非實際的な形から實用的なものへと推移して行つた事實と理由とを、木器の先行によつて考へ、禮の盛衰によつて説かうとせられるが如き著者の見解もまた、現在の段階におけるものとして最も興味深く讀まれるものである。(東方文化研究所發行、四六四倍版、本文五三頁 圖版五〇、定價拾五圓)(小林行雄)

## 河南安陽遺寶

梅原末治編

本書は、河南安陽の殷墟、並にその附近の古墓から出土したと云ふ遺物の内、編者の矚目され、且つその信すべき遺品を認められた主要な遺品を収録されたものであつて、嚮に公にされた『洛陽金村古墓聚英』『紹興古鏡聚英』などと共に編者が絶えず努力を拂はれつゝある地域的一掃遺物の圖録として一連をなすものである。而してこれ等の遺跡を離れ伴出物も不明な遊離した遺物の形式學的見地による聚成が、盜掘の繁く、學術發掘の機會に乏しい支那考古學に於いて如何に重要であるかは今更事新しく言ふまでもなからう。

彼の殷墟が、龜版獸骨を多數出す事から學者の注意にのほり、やがて學界に話題を供する様なつてから可成り久しい年月を経た。その間、中國は勿論、我國に於いても殷墟に就いて幾多の貴重な研究が行はれ來つたが、中にも昭和三年以降、直接殷墟の包有する文物そのものを大々的に取り出しその文化の解明に資せんとした中央研究院歴史語言研究所の企ては、これが根本的解決をもたらすものとして最も注目すべき業績であつた。

而して、その事業は、最近事業直前までも繼續され、實に驚くべき成果を収めたのであつたが、これが報告は大體、小屯村・後岡附近を中心とした比較的初期のものについて第四冊まで公刊を見たるまゝ、不幸今次の事變となつてしまつた爲め、支那古代文物の解明に著しい新事實を齎らしたと言はれるその後の結果については之を聞く由もない。

尤もこの事業も又、支那考古學の何時もの歎きながら、常に盜

掘の厄に伴はれ、殊に最も目ざましき、眞に驚くべき數々の遺物を提供した後半期の、侯家莊を中心とする數千の古墓の發掘の如き、土民の盛な盜掘に誘發されたとも言ふべき事情にあるので、貴重な遺物の海外に流出したものが少くないのである。従つてこれ等の四散しつゝある遺物を速かに収録し、盜掘によつて生じた缺——否むしろその重要な一半を補つて、彼の殷代遺跡の全貌をより完全なものたらしむる事は最も肝要な事であり、殊に今日同發掘の報告が、しばらく望めない以上、それに代るものとして安陽物の全般を推さしめ、特にその内容上最も立派な特色的な遺品を通觀し得る聚録を持つ事は甚だ望ましい事である。

以上本書を披見しつゝ、その立場などについて思ふがまゝ、をしるしたが、次に本編の内容につき大略を述べてその一般を傳へる事とする。

本書收むる所の圖版九十七、卜貞龜版獸骨より利器類、彝器及びその鎔范、白陶類や石製品及び玉器、更に象牙骨器等と各類の代表的なる遺物を列ね、之を解説七十八頁を加へて居る。而して卷頭には序説を附して安陽發掘調査の經過、並びに同遺跡の概觀を述べてとかく明瞭を缺いた同道跡の全貌を明かならしめられ、昭和十一年、自ら南京に赴いて中央研究院に傅斯年、李濟、梁思永、董作賓諸氏を尋ね、親しく會談せられた編者にして聞き得る新事實又少くない。而して解説の本部には後記として所謂安陽物の性質觀を結論的意味に於いて論せられ、從來我が學界に於いて殷の後半を以て金石併用の文化階段とする事が、發掘初半期の成

果に提へられたる考へにして妥當を缺き、龜版、獸骨文の展示する世界は本圖版の總體が語る如く、はるかに進んだ古銅器の文化段階にあるべき事を述べられて居る。尤もそれらは等しく古銅器の文化と言ふも、殷墟物はそれ自身として著しい通性を示すものであつて、先に『戰國式銅器の研究』或は『金村古器聚英』等によつて明かにされた古銅器文化の様態と顯著な對比をなし、そこに安陽物の著しい性格が考へられる事は本書を繙く人の直ちに看取する所であらう。而して支那古銅器惹いて古代文化の研究も、こゝにはるかに上限に遡つた基點を得る事となつて、將來新たなる進展を見るべき事が期待されるのである。(昭和十五年十月、京都小林寫眞製版印刷所發行、定價金貳拾五圓)(岡田芳三郎)

## 西藏文蒙古喇嘛教史

橋本光實編

## 蒙古喇嘛教史

ジクメ・ナムカ著  
外務省調査部譯

前者は西藏原文の校刊本であり、後者はその譯注本であり、共に橋本光實師の手に出でたるものである。原文並びにその獨逸譯本は早く半世紀も以前に出版され、廣く東洋學界に傳播され裨益を興ふる事甚だ大であつたが、既に稀觀文獻に屬するので、こゝに此の出版を見るに至つたのは誠に感謝に値ひすべきことと云はねばならない。殊に獨逸譯が唯一の譯本であつたのを我が國語に

原文から譯出されたのは誇つていゝと思はれる。

ジクメ・ナムカの傳記、及び本書述作の緣起は本書末尾に記載されてゐるが、それが唯一である。ペリオは彼を蒙古人と見た(Cf. *Journal Asiatique*, XI<sup>e</sup> Serie, Tome I, p. 656.)が、ラウフェルは西藏人であると(Cf. *Toung Pao*, Vol. XIV, p. 585, note)した。橋本師も「西藏人ならん」と云はれるが、先づそれが穩當だらう。彼の著作は刊本になつてゐるんだが、何處の刻か分らない。ワシリエフは東蒙古に出たと云ふ(Cf. *Mélanges Asiatiques*, St.-Petersbourg, Tome I, p. 414.)丈である。この刊本も稀觀と見え、多く世に傳はらず、殆んど皆フット校刊本を利用してゐる。

本書は早くロシアに送られてゐたが、ワシリエフが送つた本により、シフネルがその注意すべき資料たるを紹介して(Cf. Bericht über die neueste Buchensendung aus Peking, von Anton Schiefner, Mélanges Asiatiques, Tome I, p. 405, p. 414, p. 422-)から、世に知らるゝに至つた。ワシリエフは又露都のみでなくカザン大學には刊本の外に著者原稿本の移寫本だが少し異同の有るものがあると報告(Cf. Die auf den Buddhismus bezüglichen Werke der Universitäts-Bibliothek zu Kasan, von Prof. Wasiljew, Mélanges Asiatiques, Tome II, p. 363.)因に「フットは彼の獨譯本の序拾頁に之を引いて亞細亞雜覽第一卷としてゐるが第二卷の誤植である」としてゐる。流石にロシアには珍本がある。シフネルは本書を出版せん